教師の腕前診断

城ケ崎流

今回のテーマ

良好な人間関係をつくるための聞き方

文｜城ケ崎滋雄（千葉県船橋市立高郷小学校）
イラスト｜吉田朋子

「エクセルで全角を半角に直したいのですがどうやってやるのですか？」背後から声がかかります。急いでいたのですが、用意された椅子に座り、計算式を打ち込みました。

どうして手伝いをしようという気になったのかというと、優越感を満たされたからです。

同僚の言葉からは「城ヶ崎さんに聞けばパソコンの事は何でもわかる。それに嫌な顔をせずに教えてくれる」という言外の意味をヒシヒシと感じました。私はいい気分でパソコンに向かいました。

今回は、良好な人間関係をつくるための聞き方というテーマです。

1　当たり前のことを賞賛する聞き方

登校したら宿題を教卓に提出することになっています。昨日の宿題は漢字です。しかし、漢字ノートの「山」が低く感じます。未提出者がいるのです。

Q1　どんな聞き方で提出を促せばいいでしょう。

① 出していない人はいませんか？
② みんな出しましたか？
③ 漢字テスト、忘れないうちに早くやりたいでしょう？

「①」は、未提出者がいるという前提で聞いています。

教師の意識は「忘れた子」に向けられます。催促されてノートを持って来た子どもに、「遅い」「ちゃんと出しなさい」と文句を言いたくなります。

その結果、教師の頭から、宿題をちゃんとやった子どものことが抜けてしまいます。彼らの努力は評価されずじまいになってしまいます。

「②」も同様です。

「出しましたか」は一見温和な言葉遣いですが、「出していない人がいる」という前提で聞いています。子どもたちはそれを敏感に察知します。

この言葉の後には「出していない人は早く出しなさい」というセリフが続きます。おずおずとノートを提出した子どもに、「登校したらすぐに出すこと」と小言を言いたくなります。

こういう説教はクラスのムードを暗くさせます。きちんと提出した「よい子」まで、自分が叱られた気分になるからです。「よい子」ほど、教師の言葉を真摯に受け止めてしまうのです。

ではどうして、安易に「①」「②」を選んでしまうのでしょう。それは該当する人数が少ないので、対応する時間が短くて済むからです。持ち物検査もそうです。つい、「○○を忘れた人」と聞いてしまいます。

教師が目を向けるべきは、ちゃんと提出した「よい子」です。

私なら「③」を選びます。

すると、「すぐにやりたい！」という自信満々の声や、「もう少し時間が欲しい」という小さな声があがります。

「お母さんがテストをしてくれたんだよ。満点だったよ」

「いいお母さんだね。感謝だね。じゃあ、漢字テストが待ち遠しいでしょう」

間髪を入れず、元気な声が返ってきます。

「はい！」

別の子どもが言います。

「一行書いたけど、覚えられなかったから二行練習したんだよ。お陰で覚えられたよ」

課題以上の練習を自らに課したようです。この発言に半数の子どもが頷きます。「できるまで練習」という当たり前のことが浸透した瞬間、クラスが知的な雰囲気になります。

「よい子」を対象にしているので教師は笑顔を絶やすことなく過ごせ、幸せな気分になれます。

当たり前のことでも、やれば認めてくれる、褒めてくれると感じれば、子どもは教師を信頼し、良好な人間関係を構築できます。

さて、漢字ノート未提出者です。彼らはバツが悪そうにノートを持ってきます。

「やってきても提出しなければ、やっていないのと同じです。お金が入っていない財布での買い物、電車が発車したホームにたどり着いたのと同じです。明日はどうするの？」

明日の決意と具体的な行動を聞いて、ノートを受け取ります。

2　いい気分でもっと喋りたくなる質問

早速漢字テストをしました。お母さんと模擬テストをした子どもはめでたく満点でした。

Q2　子どもの頑張りを評価するにはどんな聞き方をしますか。

① どれくらい練習したの？
② お母さんは何て言うかな？
③ 今夜も練習するの？

「③」は欲張り過ぎです。

子どもは、昨夜は最大の努力をしたことで

教師の腕前が試される、学級経営のひとくふう。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

しょう。それなのに「今夜もやりなさい」と言われると辛いものがあります。

強制される努力は苦痛です。解放されたいという逃げの気持ちになります。大人でもそうなるのですから、子どもはなおさらです。

努力の決意表明は子ども自ら発するものです。

私なら「①」「②」です。

「①」は、子どもの努力の過程を聞いているのでいい気分になります。

人は苦労話をしたがるものです。苦労の度合いが強いほど熱弁をふるいたくなります。しかし普段は、理性がそれを制御しています。「苦労話」は「自慢話」でもあるからです。その理性を教師の質問によって解いてやります。

すると、子どもは堰を切ったように昨夜の勉強の様子を披露します。「眠かったけど、9時まで頑張った」、「帰宅してすぐ始めたら、遊びに行くのを忘れた」、「自分でテストをしたんだよ」。

「②」は「お陰様」という感謝の気持ちを育てます。

子どもは、『『がんばってよかったね』って褒めてくれるよ」とお母さんが喜ぶ顔を想像しながら身を乗り出して話します。教師は子どもの話を折らないように、「へえー、そうなの」とますますいい気分にさせ、話を促します。

話が一段落ついたころ、教師が「いいお母さんだね。今日の満点をお母さんに教えると喜ぶよ。感謝だね」と話を閉じます。

子どもは帰宅するやいなや満点のことを母親に報告するでしょう。夕餉の一家だんらんの席が和気あいあいとなり、ますます良好な親子関係が構築できます。親子で勉強する時間も増えることでしょう。

3　励まさず、頑張りを促す質問

朝運動の時間に初めて竹馬に挑戦する子どもがいます。その時は、3歩前に進めました。昼休みも練習し、8歩まで進歩しました。

Q3

下校するその子どもにどんな言葉をかけて明日の意欲を喚起しますか。

① 明日は10歩以上できるかな？
② 今日は何歩できたの？
③ 明日は今日よりも伸びるかな？
④ 明日もやるの？

「①」は、更なる目標を提示しています。一見、意欲を喚起しているようですが、そうではありません。

「無理だよ。だって業間休みに8歩で、昼休みはそれを更新できなかったんだよ。いくらがんばっても8歩以上進めなかったから無理」

その言葉には「先生は私の努力を知らないでしょう。私の気持ちをわかってくれない」という批判が含まれています。今日の努力の限界が8歩だったのです。そう簡単に更新できるとは思えないのです。

「③」は「意欲挫き」の一言です。子どもの負担を軽くしてやろうという配慮でしょうが、「明日は今日よりもできるようになりたい」という意欲、期待が薄れます。せめてもの救いは、「明日も練習をするよね」と期待していることです。

「④」も「意欲挫き」ですが、「③」以上に不適切な言葉です。明日も練習しようと思っている子どもの意欲を挫きます。「何でそんなことを聞くのかな？」と不信感を持ちます。明日も先生と一緒に練習して上手くなろうと思っている信頼関係を崩すことにもなります。

私なら「②」です。今日の頑張りを賞賛し、明日の意欲を喚起させる聞き方だからです。

今日のベスト、限界が8歩です。「もしかしたら8歩以上は無理なのではないか」と期待よりも不安の方が大きいのが本音です。明日は今日の積み重ねです。教師はそこまで子どもの心理を斟酌する必要があります。

良好な人間関係をつくるための聞き方のポイントは、相手が何を喋りたがっているかを察知することです。

相手が言いたいことを引き出してやる「呼び水」のような言葉を「捧げる」と、相手は気持ちよく話してくれます。